

障害のある人々への相談支援には、市町村による障害児相談支援事業と障害者相談支援事業があります。前者は地域で暮らす障害児の通所支援の利用について、後者は障害福祉サービスの利用について計画を立てたり、見直しをしたりする事業です。しかし、障害のある人々（子どもを含む）や家族は、もつとたくさん、そして多様な「相談」への要求をもっており、その要求は人生の歩みとともに質的に変化していきます。

全国障害者問題研究会（全障研）などによる発達保障の研究運動は、その草創期から、単なる相談ではなく、「発達相談」を実践と研究の課題として位置づけてきました。それは、以下のような自治体実践などに多くを学んだからです。

後に「大津方式」と総称されるようになった滋賀県大津市における乳幼児健診と障害乳幼児対策は、1950年代後半から滋賀県立近江学園研究部と大津市の協力、共同をはじめとする地域連携によって始められました。高度経済成長期の環境悪化や地域の教育力の低下から子ども自身の健康を守ろうとする目的意識のもとで取り組まれたものです。なかでも障害の早期発見・対応は重要な課題となり、その方法も科学的な検討を重ねられてきました。1970年代には医師や保健師とともに、心理専門職としての「発達相談員」の常勤化が図られ、「大津方式」を進めるチーム体制が構築されてきました（この経過は、稲沢潤子著『涙より美しいもの——大津方式にみる障害児の発達』「大月書店、1981年」を解説した荒木穂積「発達保障

のために学びたい本②』『障害者問題研究』第42巻第2号、62-67ページ、2014年に詳しい）。これらに学び、日本の各所、なかでも「衛星都市」と呼ばれた大阪市の周辺自治体において、障害乳幼児のための通園施設の開設とともに「発達相談員」の常勤化が進んでいきました。

また、全障研の「全国障害者医療研究会」（第1回は1970年）に集う医療関係者や全日本民主医療機関連合会（民医連）傘下の各地の小児科医療が中心になって、チーム医療に「発達相談員」を位置づけていく取り組みが始まりました。

「発達相談」の役割の一つは、その名の通り発達と障害への科学的な認識によって、発達を達成していくための方法を探求することです。しかし、「発達相談」に込められた意味と役割は、それに限られません。大津市における乳幼児健診が、子どもの心身の健康を守ることを目的としていたように、発達は心身の健康と、その基盤となる暮らしがあつてこそ保障されるものです。障害は、暮らしとその向上を制約し、子どもや家族は具体的で多様な暮らしの問題を抱え込むこととなります。

「発達相談」は、そのような暮らしの問題を受けとめ、解決の糸口をもとに考えあつてきました。たとえば放課後の家庭生活で、子どもがさまざまな行動の問題をもち、家族が苦しんでいるならば、育児方法を検討するばかりではなく、家庭外の空間や人間関係において自我を発揮できることが大切だというように、暮らしの場と人間関係を新しく創ることを提案してきました。つまり家庭でも学校でもない「第3の世界」を求めているという子どもの発達要求を発見し、その要求を生かすための暮らしの場や人間関係を、家族や志ある人々と荷を分かちあつ

て創りだすための創造的な協議の場が、「発達相談」なのです。

発達保障のための相談活動は、既存のサービスを利用することへの相談支援とは異なり、発達の基盤となる暮らしを創るために何が必要なのかをとともに考え、その条件が乏しければ行政にはたらきかけ、あるいは地域の協力、共同を組織しながら新たに創りだしていく役割を担おうとしてきました。換言すれば、法制度を適用するための相談ではなく、新たな法制度を生み出していくための活動でもあります。

また、相談支援という「支援」という言葉が、今日の法制度においては当事者へのサービス提供という一方向性を基本としていることに対して、「発達相談」は権利主体者の発達要求を尊重し、その実現のためにお互いが力をあわせるといふ双方向からの共同性を大切にしてきました。

それゆえに「発達相談」に携わる者は、その共同のなかで常に自らを省みざるをえず、いろいろな苦しみを味わいます。発達や障害の認識の確さとともに、暮らしとそれを成り立たせている労働の実態をありと想い描く想像と共感の力、発達要求の実現を阻む社会的障壁を見抜く批判力と社会変革への意志を、問われ続けることになるのです。

この「発達相談」に携わる者の誠実な自己変革の姿勢は、障害のある人々とその家族、なかでもお母さんやお父さんが、わが子への願いを超えて、すべての子どもたちの権利保障と社会変革のために立ち上がられる契機になることでしょう。私は全障研運動を通じて日本の各所で、その姿を見つめてきました。

全障研は、この相談活動が日本の隅々に根を張り、幹を伸ばし、しなやかな枝葉を広げて、発達保障の大輪の花を咲かせるための新たな取り組みを、今、始めようとしているのです。

白石正久